

垣御普請被仰付候様被仰上可被下候。以上。

元祿十年四月七日 三口村肝煎 六右衛門

三、屋村肝煎 次郎右衛門

大河端村肝煎 傳右衛門

田井村 次郎吉殿

右書付之通相違無御座候に付、致與書上之申候。以上。

田井村 次郎吉

御改作御奉行

左註に、右延寶四年之事は延寶之留に在之。尤改作奉行取
味にて、道橋方より出來相濟候事。とあり。按ずるに、右
橋梁ども其の以前は郡地の用水橋にて、村方より架替・修
繕等致し來りしかど、追々町地と成るに依つて、町奉行の
手より取味ひ、道橋方の役所より出來せしもの也。

○堀川揚場

龜尾記に云ふ。淺野川一錢橋の川下に、あげ場とて、栗崎
其の外能登近郷の村々より出づる材木などを引き來り、爰
にて上ぐるなり。又大河端村まで爰より通ふ船もあり。此
の邊はいにしへ川を掘りひらき、材木を川より引上ぐるよ

り、惣名を堀川と稱する事とはなりぬ。寛永の比専らなり
しと舊記に見えたり。といへり。今按ずるに、此の揚げ場
は堀川の末にて、淺野川の川縁をいへり。

○讚岐町

寺町實集寺由來書に、承應元年堀川讚岐町に而建立。とあ
り。龜尾記に、讚岐町といふ古名あり。いにしへ石野讚岐
の居地なりし故の名なりと。又云ふ。石野氏は元堀川邊に
居す。故に讚岐町の名ありといふ。予往年或藩士の乞によ
り、讚岐町の地を穿鑿すれども絶えて知る者なし。坊正す
ら傳聞せずといへり。然れども、往々諸舊記に見えたり。
とあり。今按ずるに、其の地は詳かならずといへども、そ
のさき讚岐町と呼びたりし地は、石野氏の下邸ならんか。

慶長十六年九月廿三日、横山山城守等連名、屋敷奉行淺野
將監等宛名の下屋敷步數定書に、

六千九百石

一、一町七反二畝拾五步

石野讚岐守

右の如く見えたり。

○石野讚岐守氏次傳

三州志變囊餘考に云ふ。石野は本姓赤松にて、則祐の末裔
なり。石野和泉氏滿は、播州三木城の別所と云ふに居す。
弓術の達者なり。三木迫合の時、槍功あり。有馬法印の女
婿たり。後吾が藩に來り、利家卿に奉仕し、七千七百石を
賜はり、人持組なり。武州八王寺・加州大聖寺の城攻に敵首
を取りて高名し、慶長十二年に病死す。其の子讚岐氏次な
り。利常卿に奉仕し、大坂役に与力の引回し方不正也。此
事公斷の上、氏次を改易せらる。知行六千五百石なり。其
の子半左衛門へ新知千五百石を賜ふ。半左衛門の子半左衛
門僻行多く、寛文九年絶炊すと。平次按ずるに、元和元二
年の士帳に、六千五百石石野讚岐、八右衛門与替ると見え、
寛永四年の士帳に、六千五百石石野八右衛門と載せたり。

有澤武貞の古兵談殘囊集に、寛永五年三月高德公三十三回
の法會の時、石野讚岐・篠原織部・葛巻隼人三人法會奉行を
勤め、寶圓寺に於て讚岐と織部との口論ありし事を記載
し、讚岐は五千五百石なりしが、領分の百姓當り不宜儀有
之、身代果てたり。とあり。此の傳説に據れば、三州志に、
大坂役に與力の引回し方不正云々といへるは過聞ならん

か。有澤氏の讚岐が家祿を五千五百石と載せたるは非な
り。龜尾記に、石野家藏に簾の名號といふものあり。讚岐

の妻は畠山將監の娘なり。此娘の持來れる名號なりとい
ふ。畠山大隅の姉は蓮如上人の室なれば、此因みをも持
傳へしならん。といへり。又寛文元年の士帳に、御馬廻組
千五百石石野半左衛門五十三歳とあり。此の半左衛門は初
代半左衛門にて、讚岐の子なるべし。また後々まで藩士に
石野氏あれど、讚岐の後にあらず。諸士系譜に、其の祖を
石野右京進と云ひ、此の子源兵衛慶長五年瑞龍公被召抱、
四百石賜之。とあり。但し、本國播州とあれば、讚岐と同
族ならんか。

○笠市町

此の地は、堀川臺にても殊に繁昌なる地にて、世人堀川笠
市と呼び、町名の如く成りたりしゆゑ、今は笠市町とす。

○笠市場

此の地は、昔より笠問屋の者共多く居住し、市中および郡
方町村の女子共の縫立てたる菅笠をば取纏め、荷物に認め
諸國へ運送す。故に笠市と呼べり。笠市といへるは、笠市